見上潤: いわゆる「1908 年問題」について　―スクリャービンおよび新ウィーン楽派における調的スペクトラムの比較分析―

無調性とは何か？なぜ発生したのか？いかに分析するか？という観点から音楽史をたどると、1908 年あたりに何かを踏み越えていく直感を得た。柴田南雄『西洋音楽史 印象派以後』(1967)によれば、まさに第 1 次世界大戦前夜の白熱した時代の起点となる年だった。この書にしたがって、まずはこの時代にヴァーグナー以降の作曲家がいかに関わったのかを問い、そして中世からヴェルディまでの半音階の系譜(クロマティズム)についても歴史的に鳥瞰にした。音楽理論の観点からみれば、無調性およびクロマティズムとは古典的和声法からの逸脱と言えるが、それは音楽史のどの時代にも存在していたし、近代における変化・変遷も漸次的であって、調性と無調性の間には境界線を引くことは困難である。ここからこれらの現象全体を、調的スペクトラム(Spectrum＝連続体)としてとらえることを提起した。この一連の現象に関して、すでにドビュッシー、ラヴェルまで射程に収めた島岡ゆれ理論(1998)をどこまで拡張・応用しうるか、さらに PC セット理論やオトゲノム理論の有効性を引き続き問う。

本発表は、スクリャービン《ピアノソナタ第 5 番》Op.53(1907)から《ピアノソナタ第 6 番》Op.62(1911)、シェーンベルク《室内交響曲第 1 番ホ長調》Op.9(1906)から《歌曲集『架空庭園の書』》Op.15(1909)、ヴェーベルン《パッサカリア》Op.1(1908)から《『第 7 の環』による 5 つの歌曲》Op.3(1909)、ベルク《ピアノソナタ》Op.1(1908)から《弦楽四重奏曲》Op.3(1910)を分析対象にする。分析の指標として、調号の使用法とその使用の放棄、開始部分および終止部分の和声に着目した。これらの作曲家がほぼ同時期に似たような経過を経て作風を変えていったことは興味深い。